



Title	数量詞の付加に伴う限界性解釈による動詞の分類
Author(s)	張, 琴琴
Citation	研究論集, 25, 147 (左) -159 (左)
Issue Date	2026-01-16
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.25.l147
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98768
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_rjgshhs_25_p147-159_l.pdf



数量詞の付加に伴う限界性解釈による動詞の分類

張 琴 琴

要 旨

本論は、数量詞の付加に伴う限界性解釈の変化という観点から、日本語動詞の新たな分類体系を提案するものである。従来ほとんど注目されてこなかった開始限界を取り入れ、動詞には開始限界と終了限界という2つの限界が存在すると想定する。その上で、従来の限界動詞・非限界動詞の二分法に代わり、両限界の有無に基づく理論上の4類型を設定する。さらに、数量詞の付加が限界性（telicity）の解釈を変化させる可能性を分析し、この4類型が理論上9類型まで拡張できることを示す。各類型について、成立可能性・文脈依存性を詳細に検討し、数量詞が動詞のアスペクト的特性に及ぼす多様な作用を明らかにした。

1. はじめに

限界性とは、ある種の動詞は必然的な終了点を有する出来事を表す。「(洗濯物が) 5分で乾いた」などの場合、5分でその終了点に達したといえる。このような点を、限界点（telic point）といい、限界点を持つ動詞を限界動詞（telic verb）、持たない動詞を非限界動詞（atelic verb）という（『日本語学大辞典：18』）。数量詞の付加によって動詞に限界性が生じる現象は、北原（1998）、畠山（2008）、加藤（2010）、三原（2022）などの先行研究において論じられている。張（2025）では、動詞は本来的に、開始限界と終了限界の両方を有するもの、いずれか一方のみを有するもの、あるいは限界性を欠くものという4分類に整理されると指摘した上で、数量詞の付加によって、動詞の限界性解釈が当初の4分類から最大で6分類に拡張可能であることを示している。ただし、同研究においては、その拡張に関する詳細な分析は未だ十分に行われていない。

本論では、張（2025）の指摘を踏まえ、特に他動詞に焦点を当てつつ、数量詞の付加に伴う限界性解釈の変化を手がかりに、日本語動詞の新たな分類体系の構築を試みる。

2. 先行研究

従来、日本語の動詞は限界性の観点から限界動詞と非限界動詞に分類されてきた(工藤 1995, 金水 2000 など)。数量詞との共起による限界性の分析は、北原(1998)および三原(2022)が取り上げられる。また、数量詞などを用いて動詞の限界性を判定する試みとして、畠山(2008)の研究が挙げられる。

北原(1998)は、主として語彙意味論の立場から、移動動詞と数量表現との共起関係を検討した。数量詞を意味的に位置変化量を表す数量詞と期間を表す数量詞に区別し、それぞれが限界動詞(来る・行く・戻るなど)および非限界動詞(歩く・走る・飛ぶなど)とどのように共起可能かを分析している。例を以下に示す。

- | | |
|--------------------------------------|--------------------------------|
| (1) 太郎が 200 m 歩いた。 | (位置変化量 Q + 非限界 V) ¹ |
| (2) 太郎が仙台駅まで 200 m 歩いた。 | (マデ + 位置変化量 Q + 非限界 V) |
| (3) 花子が 100 m? * 入った / ??行った / ?戻った。 | (位置変化量 Q + 限界 V) |
| (4) 花子が大学まで 2 km 戻った。 | (マデ + 位置変化量 Q + 限界 V) |
| (5) ??花子が仙台駅まで 1 km 行った。 | (マデ + 位置変化量 Q + 限界 V) |
| (6) 太郎が 1 時間歩いた。 | (期間 Q + 非限界 V) |
| (7) 太郎が駅まで 1 時間歩いた。 | (マデ + 期間 Q + 非限界 V) |
| (8) ??太郎が 1 時間駅まで歩いた。 | (期間 Q + マデ + 非限界 V) |
| (9) 花子が 1 時間? * 行った / ??戻った。 | (期間 Q + 限界 V) |
| (10) ??花子が家まで 1 時間戻った。 | (マデ + 期間 Q + 限界 V) |
| (11) *花子が教室まで 1 時間戻った。 | (マデ + 期間 Q + 限界 V) |

北原(1998: 17-19)

これらの例に基づき、北原(1998)は数量詞の意味区分と移動動詞の共起可能性との関係を整理している。しかしながら、例えば「花子が家まで1時間で戻った」のように、期間を示す数量詞の後に格助詞「で」が付加されることで、文の自然さが著しく向上するという現象は、北原(1998)の理論的枠組みでは十分に説明されていない。

また、畠山(2008)は、「期間句テスト」、「V かけの」テスト、「てある」テスト、「ひと V する」テスト、「ついさっき」テスト、「いつ」テストという従来存在する複数のテストを指摘した上で、「てある」テストと、「ひと V する」テスト、「いつ」テストを組み合わせることで限界性をより正確に判定できると主張している。例を以下に示す。

¹ 各例文に続く説明は、すべて筆者によるものである。

- (12) a. 花瓶を割ったのはいつ？／シチューを作ったのはいつ？
b. ??花瓶をひと割りする／??シチューをひと作りする

畠山 (2008 : 36)

畠山 (2008) によれば、「いつ」テストを単独で用いる場合、動詞の限界性が誤判定されることがあるという問題点を指摘している。例えば、(12a) に示される文では、「花瓶を割ったのはいつ？」や「シチューを作ったのはいつ？」といった表現は、発話時点での動作の進行を示すものではなく、むしろ完了した事態を指しているにもかかわらず、「いつ」テストの結果としてこれらの動詞が非限界動詞に分類される可能性がある。これに対し、「ひと V する」テスト (12b) は、こうした誤判定を回避する役割を果たしていると考えられる。すなわち、「ひと割りする」「ひと作りする」といった表現は、動詞の限界性をよりの確に反映し、非限界動詞と限界動詞の識別を促進する効果を有する。ただし、必ずしも「ひと V する」テストを用いなくとも、「花瓶を1つ割った (ている)」のように数量詞を付加するだけで、「割る」という動詞が非限界動詞ではなく限界動詞として判定可能であると考えられる。これは、数量詞の付加が動詞の限界性解釈に直接的な影響を与え得ることを示唆しており、限界性の判定における重要な手がかりとなると考えられる。

さらに、三原 (2022) は動詞の他動性に着目し、数量詞連結が可能か否かについて、日本語の動詞を「①強影響動詞」、「②弱影響動詞」、「③非影響動詞」、「④反影響動詞」という4種類に分類している。具体的には以下のような例が挙げられる。

- (13) 彼はレンガを花壇に6つ積んだ。 (強影響動詞)
(14) 僕は英単語を試験に備えて200個暗記した。² (弱影響動詞)
(15) ?校長先生は生徒を朝礼で2人誉めた。 (非影響動詞)
(16) *菜穂子は親友をそれでも2人信じた。 (反影響動詞)

三原 (2022 : 90-92)

三原 (2022) によれば、①の強影響動詞は必ず明確な終了限界を有しており、その限界点において動作の結果としての状態変化や位置変化が生じるとされる。一方、②の弱影響動詞および③の非影響動詞は、アスペクト的な性質において差異が認められ、これらは①の強影響動詞と④の反影響動詞との中間的な位置付けにある。特に④の反影響動詞は、明確な終了限界を欠くことが特徴である。また、三原 (2022) は動詞の限界性を判定するための有効な手法として、

² 原文では「僕は英単語を試験に備えて200暗記した」となっているが、数量詞「200」の後に「個」が省略されていると考えられる。ここでは明確化のため「200個」と補った。

「～で」(完了点を示す)と「～(の)間」(持続を示す)を用いたテストを提案している。具体的な例を以下に示す。

(17) 小屋を {2時間で/*2時間の間} 壊した。 (限界動詞)

(18) 同僚を {*2年間で/2年間} 信じた。 (非限界動詞)

三原 (2022 : 93)

これらの先行研究を踏まえると、動詞の限界性は共起する目的語にも影響を受けるが、「～で」や「～間」を伴わずとも、数量詞の付加によって限界性が付与される場合があることが示唆される。そこで本研究では、数量詞の付加によって動詞の限界性が変化・付与される現象に焦点を当て、この観点から日本語動詞の分類を試みる。

3. 理論的なパターン

張 (2025) は、動詞の中には終了限界だけでなく、開始限界を持つものがあることを指摘している。本論もこの立場を採用し、開始限界と終了限界という2つの観点から、日本語動詞の理論的なパターンを以下のように整理する(「○」は限界を有することを、「—」は限界を欠くことを示す)。

表1 動詞の理論的なパターン

理論的なパターン		①	②	③	④
	開始限界	○	○	—	—
	終了限界	○	—	○	—

しかし、張 (2025) では、どの動詞がどのパターンに属するかについての具体的説明が見られない。そこで本節では、各パターンの特徴と例を挙げながら、その理論的背景を説明する。まず、パターン①は、開始限界と終了限界の双方を備える動詞である。

(19) ケーキを作った。

(20) レポートを書いた。

(21) リンゴを食べた。

(22) コーラを飲んだ。

張 (2025) の分類によれば、「作る」「書く」は作成動詞に含まれる。この種の動詞は、動作

の遂行によって、それまで存在しなかった対象物が新たに生成・出現する事態を表す。すなわち、動作主が作業を開始し、一定の過程を経て終了することによって、初めて対象物が具現化するというプロセスを持つ。したがって、「作る」「書く」には、行為の開始時点と終了時点の双方が明確に設定されており、開始限界と終了限界の双方を備えると考えられる。

これに対し、「食べる」「飲む」は消滅動詞に分類され、既に存在している対象物が動作の遂行によって消失する事態を表す。この場合も、動作の開始点と終了点が時間的に特定可能であるため、両限界を有する点で作成動詞と共通する性質を持つと考えられる。

次に、開始限界のみを有するパターン②について検討する。

(23) ゲームを始めた。

「始める」という動詞は、その語彙的意味からして、ある行為や活動の開始を明示的に表すものであり、開始限界を本来的に備えていると言える。しかし、例(23)からは、その後の活動がいつ終了したのかについては何ら情報が与えられていない。言い換えれば、「始める」という行為の遂行は確認できるものの、その後の進行過程や終了時点は文中で特定されない。したがって、この動詞は終了限界を欠き、開始限界のみを有する動詞として位置づけられる。

続いて、終了限界のみを有するパターン③について検討する。

(24) ゲームを終えた。

「終える」という動詞は、その語彙的意味からして、ある行為や活動の終了点を明示的に表すものであり、終了限界を本来的に備えている。この限界は、事態が進行している最中では成立せず、あくまで完了時点で初めて確定するものである。したがって、例(24)においても、「ゲーム」が既に終了していることは明確である。しかし、この文からは、その活動がいつ、どのような経緯で開始されたのかは読み取れない。言い換えれば、終了時点に関する情報は明示されている一方、開始時点に関する情報は不明確である。これは、パターン②の「始める」との対照をなす関係であり、両者は意味的に逆方向の限界性を有する動詞であると言える。さらに語用的観点から見ると、「終える」は多くの場合、行為の進行過程を含意するため、文脈によっては開始点の存在が暗示される場合がある。しかし、その開始点は必ずしも文法的にコード化されておらず、発話者が明示しない限り特定できない。この点で、「終える」は開始限界を持たず、終了限界のみを持つ動詞として位置づけられる。

最後に、開始限界と終了限界のいずれも持たないパターン④について検討する。具体例を以下に示す。

(25) 犯人を疑った。

(26) 恋人を思う。

三原（2022）によれば、「疑う」は反影響動詞に分類され、限界性を持たない動詞の典型例とされる。また、張（2025）では、「思う」や「疑う」を「その他の動詞」として位置づけている。これらの動詞は、事態の開始点や終了点が時間的に特定できないという共通の性質を有する。例えば、(25)の「犯人を疑った」からは、その疑念がいつ生じたか、あるいはいつなくなったかを特定することはできない。同様に、(26)の「恋人を思う」においても、その思考や感情が始まった時点や終わった時点は文脈上明示されない。意味的には、これらの動詞は心理的な状態や態度を表し、しばしば一定期間持続する事態を記述する。しかし、その持続は外的要因によって明確に区切られる性質を備えていないため、開始限界も終了限界も言語的にコード化されない。この点で、パターン①～③の動詞がいずれかの限界性を必ず備えているのに対し、パターン④の動詞は限界性を全く欠くという点で際立っていると考えられる。

4. 数量詞付加によるパターン

張（2025）は、数量詞によって動詞の限界性解釈は本来の4通りから6通りまで増やすことが可能であると指摘している。しかし、限界性が具体的にどのように変化し、6通りはどのように発生するかについて論じられていない。本論は、張（2025）と異なり、4通りから6通りまで増やすのではなく、理論上9通りまで増やすことが可能であると考えられる。そのため、数量詞の付加によって、以下の9通りになると仮説する（「○」は本来の限界を表し、「●」は数量詞付加によって生じる限界を表し（あるいは限界性を明確させる）、「—」は限界を欠くことを示す）。

表2 数量詞の付加によるパターン

数量詞の付加による パターン		①	②		③		④			
		①	②	A	③	B	④	C	D	E
	開始限界	○	○	○	—	●	—	—	●	●
	終了限界	○	—	●	○	○	—	●	—	●

4.1 パターン①

本節では、具体例を通じて前節で示した9通りのパターンが実際に存在し得るか否かを検証する。まず、パターン①に該当するのは、開始限界および終了限界を本来的に持つ動詞である。この種の動詞においては、数量詞を文中に付加した場合でも、限界性の解釈に本質的な変化は

生じないことが確認される。具体例を以下に示す。

- (27) カップケーキを5個作った。
- (28) みかんを3個食べた。
- (29) イノシシを2頭殺した。

まず、(27)の例において、数量詞「5個」を付加しても動詞「作る」の限界性解釈に変化は見られない。これは、「作る」という動詞が、生成の完了という終点を本来的に含意する作成動詞であり、数量詞がなくとも自然かつ明確な終了限界を有しているためである。一般に、数量詞は限界性を持たない動詞に対して量的な終点を付与し、その結果として限界性を生じさせる機能を担う。しかしながら、既に開始限界および終了限界を備える動詞においては、数量詞の役割は新たな終了点を作り出すことではなく、既存の終了点を数量的に具体化し明示するにとどまる。具体的には、カップケーキを作り始めた時点で開始限界が成立し、5個すべてを作り終えた時点で終了限界が確定するという構造が成立するため、数量詞の付加は限界性の有無を変化させるのではなく、その限界の範囲を数量的に明示化する役割を果たすと言える。

一方、(28)の例における動詞「食べる」は、消滅動詞の典型例である。前節で論じたように、「食べる」という動詞は対象の消失および摂取の完了を本来的に含意しており、数量詞を伴わなくても自然な終点を持つ。したがって、「みかんを3個食べた」のように、数量詞「3個」を付加したとしても、限界性の解釈に本質的な変化は生じない。このことは、消滅動詞が本質的に限界性を内包するため、数量詞によって新たに限界性が付与されるわけではないことを示唆している。

しかし、張(2024)で指摘しているように、「みかんを3個食べている」のような「テイル」を伴う文では、本来完了用法を表す「テイル」においても、終了した動作の量によって変化していくことになる。すなわち、数量詞が逐次追加されるにつれて、全体的なアスペクト解釈も変化する。この場合、みかんの総数が明示されていないため、動作主体は理論的には無限に動作を継続することができる。その結果、動作の最終的な終了点（終了限界）を確定できなくなる。つまり、文脈によって(28)の終了限界が不明確になる可能性がある。

4.2 パターン②

パターン②に該当するのは、開始限界のみを有する動詞である。典型例としては、「始める」のように語彙的意味から明確に事態の開始を表す動詞が挙げられる。この種の動詞が数量詞と共に共起した場合、以下のような用例が観察される。

- (30) ゲームを2つ始めた。

(30) の文は、同時に2つのゲームに着手した状況を表すと解釈できる。数量詞を伴わない「ゲームを始める」という表現は、行為の開始直前の局面を指し、過去形の「ゲームを始めた」は、その開始限界を越えた直後の局面を表す。一方で、語彙的特性上、この動詞は事態の終了については何ら含意しないため、終了限界は設定されない。したがって、「始める」は開始限界のみを持つ動詞であると言える。数量詞を付加した場合でも、事態は依然として開始点のみを越えた段階にあり、この限界性の解釈は変化しない。ただし、数量詞の付加により、開始の対象が複数であるという情報が新たに付与され、出来事の量に関する解釈が具体化される。つまり、パターン②-②においては、数量詞の有無にかかわらず、限界性解釈がそのまま維持されるため、無標であると考えられる。

一方で、理論的には数量詞の付加によって新たに終了限界が付与されるタイプ、すなわちパターン②-A の存在も想定し得る。しかし、日本語の動詞を概観した限りでは、この条件に適合する明確な例は確認できなかった。これは、日本語の開始限界を持つ動詞が本質的に終了点の含意を持たないため、数量詞の付加のみでは終了限界を設定できないことを示唆する。

4.3 パターン③

パターン③は、パターン②とは対照的に、終了限界のみを有する動詞を指す。終了限界のみを有する動詞の代表例として、「終える」が挙げられる。この動詞は語彙的に事態の終了点を意味し、開始点については何ら含意しない。このタイプの動詞に数量詞を付加した場合、開始限界が新たに付与されない場合と、付与される場合の双方が理論的に想定される。本節では、その可能性を検討するため、以下の具体例を挙げながら説明する。

(31) レポートを3本終えた。

(31)で述べられているのは事態の終了点を越えたことのみであり、開始限界は明示されない。数量詞「3本」を加えた(31)は、開始限界を語彙的に付与するわけではなく、単に終了した対象の数を明示しているにすぎない。しかし、文脈によっては数量詞が提供する量的情報から開始点が推論される場合がある。

(32) 今日はレポートを3本終えた。

この場合、聞き手は「3本すべてを完了するために、それぞれを最初から着手した」という推論を行う可能性がある。このような解釈は、語彙的アスペクトによるものではなく、数量詞が提供する量的情報と世界知識に基づくアスペクトによるものであると考えられる。したがって、数量詞が直接的に開始限界を付与するわけではなく、あくまで話し手・聞き手の認知的推

論を媒介として間接的に開始の存在が想定されるにとどまる。

また、「仕上げる」も「終える」と同様に、終了限界のみを持つ動詞の典型例である。

(33) プロジェクトを1つ仕上げた。

(34) 今月は1つのプロジェクトを仕上げた。

(33) は、プロジェクトが完成し終了点を越えたことのみを表し、開始点に関する含意は語彙的に存在しない。数量詞「1つ」は、完了した対象の数を明示する役割にとどまる。つまり、数量詞は動作の終了による達成量として解釈できる。一方で、(34) は「今月は」という時間を表す文脈情報が付加されることにより、聞き手は「1つのプロジェクトを完成させるにあたり、最初から取りかかった」という推論を行う可能性がある。そうすると、文脈依存的な推論を介して開始限界が間接的に想定されると考えられる。

したがって、パターン③においては、数量詞のみの付加ではパターン③-③の解釈に限られるが、時間を表す文脈を付与することで、パターン③-Bの解釈も成立し得ると言える。ただし、このような最小限の文脈で成立する事例もあれば、十分な文脈を付与しても成立しにくい事例も存在し、その実態は単純に整理できるものではないと考えられる。そのため、今後は、文脈の種類や付与の程度と解釈成立との関連を、語用論的観点からより精緻に検討する必要がある。

4.4 パターン④

本パターンでは、数量詞の付加によって理論上動詞の限界性解釈が、パターン④-④（開始限界・終了限界ともに欠如）、パターン④-C（終了限界のみ持つ）、パターン④-D（開始限界のみ持つ）、およびパターン④-E（開始限界・終了限界の双方を持つ）の4種類のいずれかに変化し得る可能性が想定される。以下では具体例を示しつつ、その可能性を検討する。

(35) 友達を2人殴った。

(36) 私はクラスメートを2人疑った。

「殴る」は瞬間的な物理的行為を表す動詞であり、本来非限界動詞に属する。このため、数量詞を付加すると、「殴った対象が2人である」という量的情報が付与されるが、事態の開始限界や終了限界が文中で明示されるわけではない。特に、殴るという動作が同時に行われたか、時間的に間隔をあけて行われたか、またそれぞれの行為がどの時点で開始・終了したかは不明であり、限界性の解釈は不確定のままである。

一方で、「疑う」は継続的な心理的状态を表す動詞であり、非限界動詞に属する。この種の動

詞に数量詞「2人」を付加しても、対象化されるのは「疑い」という心理状態が向けられる相手の数であり、事態の開始限界や終了限界が自動的に付与されるわけではない。たとえば(36)の場合、2人を同時に疑い始めたか、異なる時点で順次疑いの対象となったかは文脈からは明確でなく、時間的範囲や限界性の構造は依然として曖昧なままである。

このように、「殴る」のような瞬間動詞においても、「疑う」のような心理動詞においても、数量詞の付加は事態の量的情報を明示する役割を果たすが、開始限界や終了限界といったアスペクト的区切りを語彙的に付与する機能は持たない。したがって、この場合は、数量詞を付加しても限界性解釈に変化が生じないパターン④-④に分類される。

(37) スーパーでぬいぐるみを1つ買った。

数量詞「1つ」を付加した(37)の場合、「買った対象の数量が1つである」ことを明示するととどまり、開始限界が新たに付与されるわけではない。つまり、「ぬいぐるみの購入」という出来事の終了点は数量詞によって明確になっているが、購入のための準備行為（店に行く、選ぶ、支払う前の状態など）がいつ開始したかは、数量詞からは特定できない。したがって、パターン④-Cに分類することができると考えられる。ただし、「今日、ぬいぐるみを1つ買った」のように、時間という情報が付与される場合、聞き手は「その日に購入行為を開始した」という推論を行う可能性がある。この場合の開始限界は、数量詞そのものの意味効果ではなく、文脈的に付与されるものになる。そうなると、パターン④-Eに分類することも可能である。

一方で、理論的には数量詞の付加によって新たに開始限界が付与されるタイプ、すなわちパターン④-Dの存在も想定し得る。しかし、日本語の動詞を概観した限りでは、この条件に適合する例は確認することができなかった。これに対し、パターン④-Eについては、以下の例文を通じて分析を行う。

(38) 家で映画を2本見た。

(39) 言語学の本を2冊読んだ。

「見る」や「読む」は、行為が一定の持続期間を伴う動詞に分類される。これらの動詞に数量詞を付加した場合、複数の対象物に対して行為が行われたことを示す量的な情報が付与されるものの、実際に開始限界や終了限界を明確にするには至らない。(38)において、「映画を2本見た」という場合、それぞれの映画の視聴開始点や終了点は明示されず、また連続して視聴したか、時間的に間隔を置いて視聴したかも文脈依存である。同様に、「言語学の本を2冊読んだ」という場合も、読書行為の開始および終了限界は数量詞によって決定されるものではなく、複数の読書対象の存在を示すにとどまる。

しかし、例えば以下の(40)のように時間的範囲を示す文脈を追加すると、限界性解釈に変化が生じる。(40)では、「昨日の夜」という時間範囲があるため、その時間範囲内で2本の映画を連続して見た可能性が高い。視聴の開始・終了点は「昨日の夜」という時間範囲に収まり、開始限界および終了限界が明確に設定されやすいと考えられる。一方、(41)のように「昨日の昼休み」といった時間では、映画を2本視聴するには十分な時間幅が想定できず、その解釈には違和感が生じる。この差異は、文脈的知識（例えば、映画1本は約2時間、昼休みは約1時間、夜の自由時間は6～7時間程度など）に基づく推意の成立によるものである。

(40) 昨日の夜、家で映画を2本見た。

(41) # 昨日の昼休み、家で映画を2本見た。

さらに、(42)の例では解釈が異なる。複数の映画視聴が述べられているものの、2本目の映画は視聴が途中で終了しており、完了していないことが明示されている。この情報の追加によって、通常成立する「2本すべて視聴した」という数量詞「2本」の強い推意は無効化される。具体的には、1本目の映画は視聴が完了したと推定される一方、2本目は終了点を越えていないため、終了限界を持たない部分的な行為であることが示される。このような場合、数量詞「2本」が示す対象の数自体は変わらないが、対象ごとの限界性は異なるため、動詞句全体のアスペクト的解釈は多層的になる。

(42) 映画を2本見たが、2本目は途中でしか見られなかった。

要するに、パターン④-Eとして成立するためには文脈が必要であり、文脈によって限界性の解釈が変化することがあると言える。

5. まとめ

本論では、数量詞が日本語動詞の限界性解釈に及ぼす影響について詳細に検討した結果、数量詞は単なる数量の明示にとどまらず、動詞に新たな開始限界や終了限界を直接または間接的に付与し得ることが明らかになった。分析の結果を表3に示す。

表 3

数量詞の付加による パターン		①	②		③		④			
		①	②	A	③	B	④	C	D	E
	開始限界	○	○	○	—	●	—	—	●	●
	終了限界	○	—	●	○	○	—	●	—	●
成立可否		成立	成立	不成立	成立	文脈必要	成立	成立	不成立	文脈必要

※ここで言及する「文脈必要」とは、解釈成立に不可欠な最小限の文脈を前提としている。

表 3 が示すとおり、これら 9 類型のうち自然な用例として確認できたのは 7 種類であり、残り 2 種類(②-A, ④-D)は成立例が見られなかった。また、成立する 7 種類のうち 2 種類(③-B, ④-E)は、数量詞単独では限界性が付与されず、文脈情報が必要となることが確認された。このように、数量詞付加は動詞の限界性解釈に多様な変化をもたらすが、その効果は動詞タイプと文脈条件によって大きく左右されることが分かった。

しかし、本論は主として他動詞を中心に分析を行ったため、自動詞における数量詞付加の効果については十分に検討できていない。今後は、自動詞を含む多様な動詞類型を対象に、数量詞付加が限界性解釈に及ぼす影響を体系的に明らかにする必要がある。

(ちょう きんきん・言語科学研究室)

参考文献

- 加藤重広 (2010)「外的アスペクトと内的アスペクト」北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座(編)『言語研究の諸相 研究の最前線』北海道大学出版会.
- 北原博雄 (1998)「移動動詞と共起する二格句とマデ格句—数量表現との共起関係に基づいた語彙意味—」『国語学』195 集, pp.84-98.
- 金水敏 (2000)「時の表現」仁田義雄・益岡隆志(編)『時・否定ととりたて(日本語の文法 2)』, pp.1-92.
- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2004)「ムードとテンス・アスペクトの相関性をめぐって」『阪大日本語研究』16 号, pp.1-17.
- 張琴琴 (2024)「数量詞の追加によるアスペクト性解釈の変化」『日本語文法学会第 25 回大会発表予稿集』pp.129-136.
- 張琴琴 (2025)「他動性の観点からみた日本語動詞の区分の再検討」『北海道大学大学院文學院研究論集』第 24 号, pp.219-239.
- 日本語学会(編) (2018)『日本語学大辞典』東京堂出版.
- 畠山真一 (2008)「動詞の限界性を判定するテストセット」A. 人文・社会科学編『尚絅学園研究紀要』第 2 号.
- 三原健一 (2022)『日本語構文大全 第 I 巻 アスペクトとその周辺』くろしお出版.

【謝辞】

本稿は、言語学フェス 2025（オンライン）におけるポスター発表の内容を加筆・修正したものです。発表の際に貴重なご助言を賜った先生方に御礼申し上げます。また、本稿の執筆にあたり多くのご教示を賜った加藤重広先生に深く御礼申し上げます。本文における誤りや不備はすべて筆者の責に帰するものです。なお、本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものです。